大人の英語の学び方
～認知科学の視点から～

Learning

今井むつみ（いまい・むつみ）

慶應義塾大学環境情報学部教授。専門は認知科学、言語心理学、発達心理学。1989年、慶應義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程単位取得退学。1994年ノースウエスタン大学心理学部博士号取得。語彙の習得・学習のメカニズムを研究しているほか、「学び」についての認知科学の研究成果を教育現場での実践に生かすべく活動している。著書に、『ことばと思考』『学びとは何か――〈探究人〉になるために』（以上、岩波新書）、『ことばの発達の謎を解く』（ちくまプリマー新書）、『言葉をおぼえるしくみ―母語から外国語まで』（ちくま学芸文庫、共著）など。

第7回

多読は語彙を増やすのに有効か

根強い多読神話

英語の学習、教育について、いろいろな人と話す機会が多いが、そのとき、一般に信じられていること――「神話」と言ってもよいかもしれない――がたくさんあって、それらが認知心理学的には何の根拠もないことに、ショックを受けることがしばしばある。

その一つが多読についてである。先日、ある編集者と話をしていた。最初に断っておくが、この人は私が心から信頼する、非常に優秀な人である。その編集者と先月号の連載について話をするなかで、日本語で同じ言葉に訳されるが概念的には非常に遠い単語の意味を、日本人学習者はみな「同じ」と思ってしまう、ということを言った。すると彼女は、「そうですね、だからそういう誤解を解くために多読をしていかなければならないのですよね」と言った。このコメントに私は驚愕（きょうがく）した。多読は英語学習において重要である。しかし、多読がもたらす効用や限界についてはまったく知らずに、ただ「多読はよい」と思い込み、多読を英語運用能力を全般的に高める万能薬のように思っていることに気づいたのである。彼女のように優秀で言語感覚が鋭い人でもそうなのかと、「多読神話」の根強さを改めて実感した。

認知心理学の実験結果が示すこと

英語学習における多読の有効性と限界について理解するには、人間の認知の仕組みについて多少理解する必要がある。一般的に、人は自分が見聞きしたことを正確に記憶していると思っている。つまり自分の情報処理能力を信じているのである。しかし、認知心理学は、それが過信であることを多くの実験で示してきた。いつも見ている硬貨の絵を正確に描ける人はほとんどいないという、認知心理学の古典的な実験結果を以前に紹介した。注意を向けていなければ、何千回、何万回見ても、対象の詳細は記憶されないことをこの実験は示している。



もっとショッキングな実験もある。白い服を着た人たちのグループと黒い服を着た人たちのグループがバスケットボールをしている。実験の参加者は、そのビデオを見て、白い服のチームが何回パスを回したかを数えるように指示された。そのビデオでは、途中で驚くべきことが起こる。着ぐるみのゴリラが画面の右端から現れ、画面の中心付近で立ち止まり、ウホウホと胸をたたく。そしてそのあと、左方向にさらに進んで画面から消えていく。ところが驚いたことに、実験参加者の多くはゴリラの存在に気がつかない。ボールの行方に注意を向けていると、それ以外のことが起きても――たとえゴリラの登場のようなまったく異常な事態が起きても――気づかないのである。私も授業でこの実験をするが、参加者の半数以上がゴリラに気づかない。この実験はYouTube（URL: https://www.youtube.com/watch?v=vJG698U2Mvo）で見ることがで

1810_bizcom_082-087_CognitiveS.indd 82-83 2018/08/20 13:17

きるので、ぜひ自分で体験してみてほしい。

結局、人の情報処理は基本的に目的志向的で、トップダウンである。ある特定の情報を得るために何かを見ていると、それ以外のことはほとんど覚えていない。注意を向けないことは、基本的に「見ていない」ことと同じなのである。

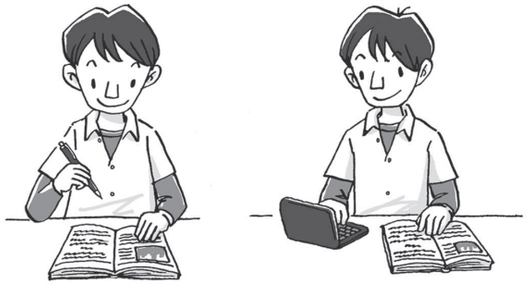
文章全体の意味をつかむのが多読

さて、ここで多読の話に戻ろう。多読の目的は何か。短い時間で文章の内容を理解し、情報を取り込むことである。そのとき、私たちの心の中で行われる認知プロセスは、書かれているテーマについての知識（スキーマ）を総動員して内容を大まかにつかもうとすることに注意を集中している。すると、一つ一つの単語の意味はほとんど注目されない。知らない単語があっても、スキーマを使って文章全体の意味をつかめれば、単語の細かい意味はいちいち考えない。

例えば、アメリカの大学における入学許可の仕組みについて書かれた文章を読んだとしよう。するとadmissionやadmitという単語に頻繁に遭遇し、admissionは入学許可のこと、admitは許可すること（動詞）という意味だとわかるだろう。しかし、日本語で「許す」あるいは「許可する」と訳されるaccept、approve、excuse、forgiveなどの単語がその文章の中に出てくるとはかぎらないので、それらの単語との差異を考えることはこの文章を読むだけではできないだろう。そもそも多読の目的は、文章全体の要旨をつかむことなので、細かい単語の意味の違いを気にしていたら、全体の意味を素早く読み取ることはできなくなってしまう。

多読学習の注意点

英語を読み取る能力、つまり読解力は非常に重要である。これは大学受験やTOEICのような試験に合格するために大事というだけではない。実際、最先端の情報は英語で書かれていることが多いため、英語を苦痛なく読めて情報を読み取ることができれば大きなアドバンテージとなるのである。多くの文章をすらすら読むには、語彙力はもちろん必要である。しかし、多読をしているときの認知過程を考えると、多読から多くの単語を覚え、アウトプットに使える語彙を作るというのは考えにくい。多読で得られるのは、ほとんどの単語を知っている文章の中でたまに出



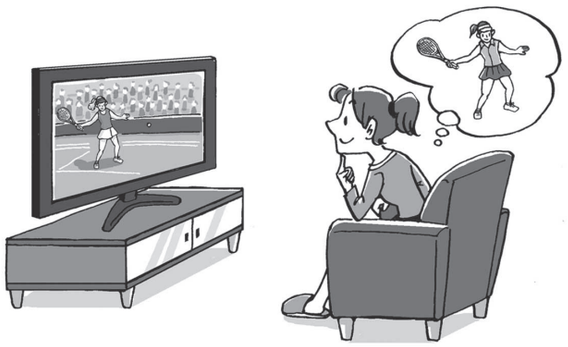
てくる知らない単語の意味を、読み取った内容と、自分が持っているスキーマを使って推測する能力だ。それ自身は非常に重要な能力なので、多読は英語学習の大事な一部である。ただし、それには学習者にとってテキストが辞書を引かなくても理解できる適切なレベルに設定されていることが前提である。テキストのレベルが学習者に合っていないと、多読学習の意味がなくなってしまうので注意が必要だ。

語彙を増やす読み方とは

Readingから語彙を増やすにはどうすればよいか。それには、一度読んで文意を読み取ったら終わりにするのではなく、何度か読み返すことである。一度目は多読の作法にのっとり、辞書を引かずに読み通し、内容を読み取ることに集中する。そのとき、自分が知らない気になる単語があったら、とりあえずマークだけしておく。二度目はゆっくりと読み進め、マークした単語をまず辞書で調べ、一度目に読んだときに推測した意味が正しいかどうかを確かめる。辞書を引くときは、最初の項目だけでなく最後まで目を通し、どの項目が最も文意に近いかを確かめる。そして、もう一度文章を読み直し、辞書に書かれていた意味がほんとうに文脈に合っているかを吟味する。ここまですれば、その単語はかなり深く意味処理がなされ、単語の意味が記憶に定着する可能性が高い。

繰り返しになるが、見慣れた硬貨に刻印されている絵も覚えられないほど、人の記憶は脆弱（ぜいじゃく）だ。注意を向けず、漠然と「見た」だけでは、詳細はおろか見たことすら覚えていないことが多い。記憶を定着させるには、深い情報処理をすることが必要なのである。

1810_bizcom_082-087_CognitiveS.indd 84-85 2018/08/20 13:17



深く情報処理された単語ほど記憶に残る

認知心理学の古典的な実験で次のようなものがある。コンピューターの画面に次々と単語が現れ、それぞれの単語について質問される。例えば、princeという単語に対して、「次の単語は小文字ですか？」、FOGに対して、「次の単語はdogと同じ韻ですか？」、tigerに対して「次の単語は動物の名前ですか？」という具合である。最初は単語の文字形態についての質問、2番目は単語の音についての質問、最後は単語の意味についての質問である。それぞれの質問タイプが10回、つまり合計30個の単語が提示される。質問セッションのあとで、さっき出てきた単語を思い出して書くように指示される。すると、最もよく思い出すことができたのは意味について質問された単語、次が音について質問された単語だった。とは言っても、意味の質問をされた単語でも、思い出せたのは10個のうち4個にも至らず、音の質問では2個程度、文字の形態に関する質問をされた単語は平均で1個未満だった。

このように、情報処理の深さは記憶に影響し、深く処理された単語ほど、記憶に痕跡が残りやすい。文章で出てきた知らない単語を覚えようと思ったら、文の中でその単語を一度や二度「見た」だけでは記憶に残らない。意味を考え、辞書で確認し、もう一度文脈に当てはめて確かめる。そのくらいしなければ、文章で初めて出会った単語を記憶に刻みつけることはできないのである。

単語を自在に使うには

しかし、このようにして記憶に残った単語は、まだ自由に文を作れる理解には至っていないはずである。単語を自在に使うには、その単語が使われる構文、一緒に使われる（共起する）単語や使える範囲、単語が持つニュアンス（例えばどのくらいフォーマルなのか、日常的に使えるのか）などを知る必要がある。それはreadingからは得られない。Readingでは、単語が使われた一つの文脈しかないからである。「使うための深い知識」を育てるには、さまざまな文脈における単語の使い方や共起語、類似する単語を一覧し、吟味することができるコーパス学習がお勧めだ。

ただし、コーパス学習で得られるのは、「頭で理解する」知識である。自由に英語を話したり書いたりするには、「頭の知識」を「身体の知識」にしなければならない。ウィンブルドンの中継を見て楽しむだけでは、自分のテニスの上達にはほとんど役立たない。録画して、「プロはこういうときどうするのか」について仮説を立て、その観点から分析すれば、上手になるためにいろいろなヒントが得られるだろう。しかし、実際に身体を動かして練習しなければ、いくら分析してもテニスは上達しない。英語もまったく同じである。「覚えた」単語を自在に使うためには、その単語を使ってたくさんの文を書く練習をする必要があるのである。

来月号は、listeningから何を学ぶことができるのか、また、英語のアウトプットができるようになるにはlisteningにどのように取り組めばよいのかについて述べる。

次号予告

第8回　リスニングの学習のしかた、学び方
――多聴は語彙の学習に役に立つか

1810_bizcom_082-087_CognitiveS.indd 86-87　2018/08/20 13:17